

弘前南高校 齊藤 凜

私は高校生になって、海外に強い憧れを感じていました。海外には日本にはない思想や考え方があり、とても興味深いと思っていました。また、日本のエネルギー問題について勉強する機会を得たいと思っていたので、この「高校生による海外エネルギー事情研修会」への参加を希望しました。参加メンバーに選ばれたときは大変うれしかったです。海外は初めてだったので、行く前は不安でいっぱいでしたが、実際に海外へ行ってみると刺激的な体験が多く、この研修会で以下に示す多くのことを学びました。

一つ目は、エネルギー問題についてです。学校の授業でエネルギーについて学習しますが、自ら原子力発電所や原子燃料サイクル施設に行くことにより原子力発電の仕組みをさらに深く理解できました。事前研修会で東北電力東通原子力発電所と日本原燃原子燃料サイクル施設を見学したため、フランス・スウェーデンの原子力施設を訪れたときは日本の施設と異なる点が分かり、現地で積極的に質問をすることができました。

フランスでは、六ヶ所の原子燃料サイクル施設のモデルであるラ・アーグ再処理工場を見学しました。私が一番印象に残った点として、詳細な情報開示が挙げられます。ラアーグ再処理工場では、地元住民・地方議員・マスコミに対して「危険なこと」をきちんと伝えるようにしています。正しい情報を得ることにより、国民の一人一人がフランスのエネルギーについて自分の考えを持てるのだと思います。

スウェーデンは、国民の意識として自然を大切にする傾向があります。そのため、将来は再生可能エネルギーで国を賄っていくと考えています。現在は技術的に不可能ですので、技術が追いつくまでは原子力発電に頼ることになります。スウェーデンの高校生と議論して感じたことは、彼らはエネルギー問題に関して自主的に情報を得ていることです。自分たちがエネルギー問題を考える必要があるという意識は、日本の高校生には無いもので、大変衝撃的でした。

二つ目は、文化交流についてです。私たちが訪問したフランス・スウェーデンの学校では日本語の授業があり、日本語を勉強している高校生と文化交流を行いました。「なぜ日本語を学びたいと思ったのか。」と聞くと、全員が「日本は面白いものが沢山あるから」と言っていました。日本に住んでいると気が付かない、世界から見た日本というものを知ることができました。また、フランス・スウェーデンの文化や歴史についても理解が深まりました。歴史的建造物・ヨーロッパの町並みは、写真で見るとよりも感動的で強烈に目に焼きついており、日本に帰ってきてからも忘れられません。特にカルチャーショックを受けたことは、食文化です。テーブルマナーもそうですが、日本人が考える「フランス料理」「スウェーデン料理」が日本人向けの味付けであると実感しました。実際に行かないと分からないことが多くあり、どちらの国も愛着が湧くようになりました。

全体を通して、「チャンスがあれば積極的に挑戦する」ことが大切だと思いました。今回の研修で言うならば、「海外の高校生とのディスカッションの場で恥ずかしがらずに発言する」などです。研修に行くまでの私は決して人とのコミュニケーションが得意とは言えず、最低限の自己主張しかしてきませんでした。しかし、研修に行くことを機に、英会話を始め、どのように表現したら自分の言いたいことが伝わるのだろうと考えるようになりました。今回のような機会はとても貴重で普通の高校生活にはないことです。将来、同じような機会はないかもしれません。その時にしかできないことは、その時やらなければ必ず後悔します。今後、もし二度とないチャンスを感じたら、結果がどうであれ、やってみようと思います。

最後に、今回の研修を経て自分の価値観が大きく変わりました。海外の高校生とのディスカッションや文化交流において、物事（エネルギー問題・異文化）に対する積極的な態度や自分が持っていなかった考え方や発想を学べたことで、視野を広く持ち柔軟に考えるようになりました。帰国してから「海外研修はどうだった？」と聞かれることがありますが、私にとってこの研修は一言では言い表せないほど、濃く充実したものでした。この経験を今度の将来の糧としたいと思っています。今回はこのような貴重な体験をさせていただきありがとうございました。